（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>　　　宰主　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、また、議論したことを、岩倉紙芝居館館主が独断で記載したものである。

子路第十三

１）子路問政子曰先之勞之請益曰無倦

zǐ lù wèn zhèng zǐ yuē xiān zhī láo zhī qǐng yì yuē wú juàn
子路政を問ふ。子の曰はく、これに先じこれを勞す。益を請ふ。曰はく、倦むこと無かれ。

子路が政について問う。子路に対する先生の応えは、先之勞之。之は民。子路が人に先んじて行うことは先生も先刻承知。勞すとはいたわること。いたわる気持ちがなければ先之が損なわれることもある。それくらいのことは分かっている、と子路は、請益。益とは水が皿から溢れてこぼれる増益系の字と糸を縊（くく）る系の二系統がある（字統）。その先を教えて下さい、と勢い込んだ。無倦と返ってきた。勞すことを倦むことなく続けることが出来なければならない、どうだできるか？子張にも先生は居之無倦（[顔淵篇14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/ganyen.doc)）と釘をさされた。ぐっとつまる子路であった。

読書会：部下、下の者には、思いやりを持って導かないと信頼関係がうまれず、組織力として強くなれない、優れた才能も必要だが、労う気持ちを大事にするようにと言った。倦むことなかれ、それを続けること、継続が大事。

２）仲弓為季氏宰問政子曰先有司赦小過舉賢才曰焉知賢才而舉之曰舉爾所知爾所不知人其舍諸

zhòng gōng wéi jì shì zǎi wèn zhèng zǐ yuē xiān yǒu sī shè xiǎo guò jǔ xián cái yuē yān zhī xián cái ér jǔ zhī yuē jǔ ěr suǒ zhī ěr suǒ bù zhī rén qí shě zhū
仲弓、季氏の宰と為りて政を問ふ。子の曰はく、有司を先にし、小過を赦し、賢才を舉げよ。曰く、焉ぞ賢才を知りてこれを舉ぐる。曰はく、爾が知る所を舉げよ。爾が知らざる所、人其れ諸を舍てん。

仲弓の年齢、何時季氏の宰となったのかが分らない。孔子と仲弓の対話の内容からすると、孔子が魯の要職にある、あるいは、人事に対して影響力を有している時期に為されているように思われる。有司とは衆職、宰に仕える役人のこと。自分のことより有司を先にせよといふ、つまり、自分が上にどう対処するかではなく、有司の小さな過ちは咎めず赦し、賢人、才人を採り立てなさい、と返ってきた。仲弓は、では、どのようにして賢才を見つけ出し採り立てればいいのですかと問ふと、まず、お前が知っている人材を採り立てなさい、お前が知らない人材については、人はお前が採り立てた人材をみて、お前の知らない人材を推挙してくる。
読書会：仲弓は身分が低いが徳を持つ人。孔子からすれば政治家に入っているものではない。政治家からは物足りないとされていた。仲弓自身も心配していたが、孔子が推薦して仕事をさせた。仲弓は政治に自信がない、子路なら自分で動かしてゆくだろうが、役所に居る者を上手く使えということ。中国の歴史で一番難しいのが人材の選択。孔子から漢の時代までは、有名人の推薦によった。九品制（門閥制）や科挙試験の制度が敷かれてゆくが、宋代には自分の好きな人で能力のない人を使ってどうしようもない選択をすることがあったが、それはこの孔子のアドバイスによるとされた。春秋戦国時代、とくに戦国時代になれば斉の稷下に知識人が集まった。正しい人を使えば人材が集まってくる。孟子の時代には遊説するということが行われた。

３）子路曰衛君待子而為政子將奚先子曰必也正名乎子路曰有是哉子之迂也奚其正子曰野哉由也君子於其所不知蓋闕如也名不正則言不順言不順則事不成事不成則禮樂不興禮樂不興則刑罰不中刑罰不中則民無所措手足故君子名之必可言也言之必可行也君子於其言無所茍而已矣

zǐ lù yuē wèi jūn dài zǐ ér wéi zhèng zǐ jiāng xī xiān zǐ yuē bì yě zhèng míng hū zǐ lù yuē yǒu shì zāi zǐ zhī yū yě xī qí zhèng zǐ yuē yě zāi yóu yě jūn zǐ yú qí suǒ bù zhī gài què rú yě míng bú zhèng zé yán bú shun yán bú shùn zé shì bù chéng shì bù chéng zé lǐ yuè bù xīng lǐ yuè bù xīng zé xíng fá bù zhòng xíng fá bù zhòng zé mín wú suǒ cuò shǒu zú gù jūn zǐ míng zhī bì kě yán yě yán zhī bì kě xíng yě jūn zǐ yú qí yán wú suǒ gǒu ér yǐ yǐ

子路が曰く、衛の君、子を待ちて政を為さば、子、將に奚ぞ先にせん。子の曰はく、必ずや名を正さんか。子路が曰く、是れ有るかな、子の迂なり。奚ぞ其れ正さん。子の曰はく、野なるかな由や、君子は其の知らざる所に蓋闕如たり、名正しからざれば則ち言順はず、言順はずば則ち事成らず、事成らざれば則ち禮樂興らず、禮樂興らざれば則ち刑罰中らず、刑罰中らずば則ち民手足を措く所なし。故に君子これを名づくれば必ず言ふ可きなり。これを言へば必ず行なふ可きなり。君子は其の言に於いて茍しくもする所なきのみ。

この衛君とはすでに見たように（[述而篇14)](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/jutsji.htm)）出公の輒（ちょう）、子路は孔子が出公を補佐することを願っていた。衛では、太子蒯聵が母の南子を殺そうとして、失敗して亡命し、靈公は弟の公子郢（えい）を後継としようとするが郢は拒む。靈公亡き後、南子も郢を推すが郢は拒む。人々は蒯聵の嫡男輒を後継とし出公とした。もし、衛君が先生を待って政治をするとすれば、先生は最初に何をなさいますか、と仮定の質問をして引き込もうとした。先生は必ずや名を正すとされるが、公子郢か晋に亡命していた嫡男の太子蒯聵か、その嫡男輒か、正しい後継者とは誰なのか？それをお前は出公を押してどう名を正せよう、と釘を刺したことになる。子路は、有是哉、また始まった、先生の迂遠なる言い回しが、それを正してどうなるというのですか、と応えた。郢は拒み該当外、晋の卿、趙簡子は蒯聵を援助し、斉は出公を援助し、戦端が開かれんという形勢にあり、補佐する以上どっちかに加担するしか選択肢はない。子路は出公と決めている、このままでは先生は先生を使う公を得ることは出来まい、ここで決めねば決める時を失うと思い切ったのであろう。先生はどちらを推すのか、子貢が聞きに行ったのが述而篇14、子貢は先生はどちらにも味方されないと判断をした。子路は先生に決断を迫ったことになる。先生は、野人だな由（子路）は。君子というものは、其所不知、分からないことは、蓋闕如（がいけつじょ）也、欠けたまま蓋（ふた）をしておくべきものだ。先生は蒯聵も輒も共に正しくないと判断しておられたのであろう、故に、どちらにも加担されなかった。名が正しくなくば言が順（したが）はない、言が順はないと事が成らない、事が成らないと禮樂が興（おこ）らない、禮樂が興らなければ刑罰が中(あた)らない、刑罰が中らなければ民は手足を措（お）くところがなくなる。子路よ、結局どうしようもなくなるから手を出すな。故に君子はこれを名づければ必ずそれを言葉にし、これを言へば必ず行なふ。茍と苟は別字で、茍は戒慎の意で敬の初文、苟は“かりそめ”、“一時の”の義、ここでは後者、共に“いやしくも”と訓じられる。君子於其言無所茍而已とは、君子が言う言葉は、一時しのぎであってはならないということ。名づけられない時には名づけるな、と先生は、子路に決断を手控えることを求められた。しかし、子路は押し切った。
読書会：名を正さんかとはどういうことか分からない。名目を正しくする、吉川先生は名称を整頓すると言っている。後の人には、名目のことは分からないし、名称を整頓といっても分からない。歴史背景を抜きにして、一般的に読むことができるのが論語。歴史的背景を知ると限定されてしまい影響力がなくなる。普遍性がなければ残らない。それがその時代の話でしか通用しないものであれば、残らない。

４）樊遲請學稼子曰吾不如老農請學為圃曰吾不如老圃樊遲出子曰小人哉樊須也上好禮則民莫敢不敬上好義則民莫敢不服上好信則民莫敢不用情夫如是則四方之民襁負其子而至矣焉用稼

fán chí qǐng xué jià zǐ yuē wú bù rú lǎo nóng qǐng xué wéi pǔ yuē wú bù rú lǎo pǔ fán chí chū zǐ yuē xiǎo rén zāi fán xū yě shàng hào lǐ zé mín mò gǎn bú jìng shàng hào yì zé mín mò gǎn bù fú shàng hào xìn zé mín mò gǎn bú yòng qíng fú rú shì zé sì fāng zhī mín qiǎng fù qí zǐ ér zhì yǐ yān yòng jià

樊遲、稼を學ぶを請ふ。子の曰はく、吾、老農に如かず。圃を為すを學ぶを請ふ。曰はく、吾、老圃に如ず。樊遲、出ず。子の曰はく、小人かな樊須なり。上、禮を好まば則ち民敢て上を敬せざる莫く、義を好まば則ち民敢て上に服はざる莫く、信を好まば則ち民敢て情を用ゐざる莫し。夫れ是の如くせば則ち四方の民其の子を襁負して至らむ。焉ぞ稼を用ゐむ。

稼は耕し種を蒔くこと収穫すること、穀類が念頭にあり、圃は果樹を植える菜を植えること、果樹、野菜が念頭にある。孔子は多能であり、農耕について樊遲は尋ねた。すると先生は、それは老農、あるいは老圃の方が詳しいのでそちらに聞いてくれと申された。樊遲が次に、では先生は何をつくっておられるのですかなど、何か切り返すかとおもえば、あっさりあきらめて、退出した。拍子抜けした先生が他の弟子に申された。小人だな樊須は。小人に対するものは君子である。上が禮を好めば、民が上を敬さないことはない。義を好めば、民が上に服（したが）はないことはない。信を好めば、民が情（まこと）を用ゐないことはない。こういうふうにすれば、四方の民は、襁負其子は子供を背中にくくりつけ背負うこと、そうしてやってくる。；どうして稼を用ゐむ。君子は禮を用ゐむ。
読書会：世の中を治めるには、下の人と同じ気持ちでしてゆかねばならない。そういう気持で聞いたが、樊遲は聞く相手を間違えた。樊遲がすっと出てしまって、場としてはばつの悪いもので、孔子は残った弟子相手に、いいわけがましく、説明することになった。樊遲がそこでさっと出て行ったということは、樊遲もなかなかの大物。孔子は若い頃、鄙事に能力を発揮した、貧しかったので何でもしたと言っており、農作業の重要性は分かっていた。孔子は農業技術ではなく、農民が安らかに農業をして暮らせる政治を行うことが自分の役割とみている。

５）子曰誦詩三百授之以政不達使於四方不能專對雖多亦奚以為

zǐ yuē sòng shī sān bǎi shòu zhī yǐ zhèng bù dá shǐ yú sì fāng bù néng zhuān duì suī duō yì xī yǐ wéi

子の曰はく、詩三百を誦して、これを授くるに政を以てして達せず、四方に使ひして專り對ふること能はず。多しと雖も亦奚を以て為さむ。

誦（しょう）すとは、聲を以てこれを節する、そらんじてうたうこと。詩三百は[為政篇２](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/isei.htm)にすでにみた。[集註](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/isei.htm)は、「詩は人情に本づき、物理を該（か）ぬ。以て風俗の盛衰を驗し、政治の得失を見る可し。其の言温（おだやか）に厚く和らぎ平かに、風諭に長ぜり。故に之を誦する者、必ず政に達して能く言うなり」政治の場において、詩をもって問ひかけられれば、詩をもって返すことができねば、達することはできなかった。これは使節として外国に派遣された場合も同じく、專（ひと）り對（こた）へる、応答が出来なければ、いくら沢山暗誦しているといっても何の役にも立たない。
読書会：詩はコミュニケーションを行うための素養で、それがないと話が通じなくなる。相手もそれがすぐ分かるから、あいつはダメだなとなる。ここで言っている詩というのは、単なる暗誦して勉強するだけのものでなく、詩文を通してこちらの意志を伝え、また相手の気持ちを取るといったところまで体得してないと、意味のないものだった。
孔子は自分の子供にも弟子にも、詩を勉強しなさいと言う。学而篇でも子貢が切磋琢磨を引用すると、共に詩を論じることが出来ると話が進む。春秋左傳においても、外交の場で詩が引用され、孟子の時代になると王様を説得することや遊説において、ものすごく詩は引用され、長い話を一言で終えることに用いられたりする。ながながと説明することなく、話を活かすことができた。もうひとつ、詩には地方の歌があり、地方の事情が歌われており、その歌を集めると、どの地方にどんな不満があるかが分かる。地方の事情を察するためにも集め、応用された。

６）子曰其身正不令而行其身不正雖令不從

zǐ yuē qí shēn zhèng bú lìng ér xíng qí shēn bú zhèng suī lìng bù cóng

子の曰はく、其の身正しければ、令せずして行はれ、其の身正しからざれば、令すと雖も從はず。

先生は上に立つものがその身を正しくすれば、下に命令しなくとも行はれ、その身を正しくしなければ、命令しても下は從はない、と申された。
読書会：正しいことを追求する、本当のこと、正のみを追及するということは、問題を起こすことがある。正義の追求が戦争を引き起こすこともある。現実には、妥協点を見出す、落としどころを知る、ということがないと問題が起こる。ここでの正は、前回の名を正すの正、君君、臣臣、父父、子子のごとく、その場にふさわしいこと、政治家としての政（まつりごと）、政治家としてあるべきものをしっかりもつこと、自分が正しく行えば、従う、風と草の譬にもあった。孔子からみれば、正＝令だが、あの時代の指導者からすれば、為政者にとって命令は大事なもの。私が正しい、民の安寧を求めるだけでなく、行われなければならない。中国全体の歴史においては、正しくなくても令する、その令に従わせること、命令は大切なもの。

７）子曰魯衛之政兄弟也

zǐ yuē lǔ wèi zhī zhèng xiōng dì yě

子の曰はく、魯衛の政は兄弟なり。

集註に、「魯は周公の後、衛は康叔の後にして、本兄弟の國なり。而して是の時衰亂して、政も亦相似たり。故に孔子之を歎ぐ。」とある。康叔、名は封。周の文王（姫昌）の子。武王（姫発）の同母弟にあたる。成王（姫誦）のとき、武庚禄父が乱を起こし、周公旦がこれを討滅すると、武庚の治めていた殷の遺民を預かり、康叔は衛の君に封ぜられた。「（周公は康叔に）くりかえし商（殷）の衰滅の故を説き、と「酒誥：しゅこう」や「梓材：しざい」とを以て戒めた。・・・南子（霊公の夫人）が蒯聵（かいかい）（霊公の太子。後の荘公）を憎んだことから、子（出公）と父（荘公蒯聵）との即位の順序が逆になった。史記―太史公自序」魯では、三桓氏が勢力をもち魯の公室は衰えた。

８）子謂衛公子荊善居室始有曰苟合矣少有曰苟完矣富有曰苟美矣

zǐ wèi wèi gōng zǐ jīng shàn jū shì shǐ yǒu yuē gǒu hé yǐ shǎo yǒu yuē gǒu wán yǐ fù yǒu yuē gǒu měi yǐ
子、衛の公子荊を謂はく、善く室に居り、始めて有ちて曰く、苟か合れり。少らく有ちて曰く、苟か完はれり。富んに有ちて曰く、苟か美し。

衛の公子、荊については大夫であったがよく知られていない。先生は、室に居て善し、と申された。始めて有（たも）ちて曰く、苟（いささ）か合（あつま）れり。合は聚る。少（しば）らくして有ちて曰く、苟か完（そな）はれり。完は備はること。富（さか）んに有ちて曰く、苟か美（よ）し。公子、荊は自ら蓄財に従事したわけではない、居室しているだけであった。君子が政治を行えば、自分が耕すことをしなくとも十分に税があつまる。苟合、苟完、苟美、このような発言をする大夫のもとに財が合、完、美された。
読書会：経済を一挙にどうこうではなく、順序をふんで国を保つ、熟成させるやりかたが上手い。ここは孔子が公子荊を評価している。家に居て満足していた。彼は満足することを分かっていた。政治家として、富に関して備わってゆくこと、上に立つべきものがどうすべきかを分かっていた。物理的満足ではなく心が喜ぶ状態、苟か美は、これくらいで気持ちいいかな、よしとする、非常に好ましい、苟があることで控え目になる。

９）子適衛冉有僕子曰庶矣哉冉有曰既庶矣又何加焉曰富之曰既富矣又何加焉曰教之

zǐ shì wèi rǎn yǒu pú zǐ yuē shù yǐ zāi rǎn yǒu yuē jì shù yǐ yòu hé jiā yān yuē fù zhī　yuē jì fù yǐ yòu hé jiā yān yuē jiào zhī

子、衛に適き、冉有、僕たり。子の曰はく、庶いかな。冉有曰く、既に庶し、又何をか加へむ。曰はく、これを富せむ。曰く、既に富めり、又何をか加へむ。曰はく、これを教へむ。

定公十四年（BC496）、孔子、年五十六、遂に衛に適く。「奉粟（ほうぞく）、六萬（史記）」を支給するということで衛に、冉有を僕、御者として出掛けたときのこと。庶（おお）いかな、とは衆、人口の多いこと。魯に比して多いのではないか、と冉有に問うと、冉有は既庶、もう越えてます、じゃ、どういう政治をしますか、と問うと、先生はこれを富ますようにしよう、と申された。冉有はもうかなり富んでいるようですから、その上でどういう政治をしますか、と問うと、先生は教育をしようと申された。冉有はいささか不安を抱いた。先生の認識が少しくずれている。この時は、「或（る人）孔子を衛の靈公に譖（しん：中傷）す。靈公、公孫余假（こうそんよか）をして一出一入（見張る）せしむ。孔子、罪を獲るを恐れむ。居ること十月にして、衛を去る（史記）。」
読書会：“既”があり次に“何”がくればセットで、何以下に力点があり、既以下がそれの条件となる。ある条件が発生した次の段階をどうする。～のことなら次はどうかの構文、日本語でのすでには、已の字が用いられ、すでに起こったことをいう。庶矣哉だから多かった。ここからは冉有が一般的な話として、もし多ければなにを、もし豊かになればなにを加えるかと聞いた。豊かにし、教育を施すこと。上の読み方は既を誤解している。

10）子曰苟有用我者期月而已可也三年有成

zǐ yuē gǒu yǒu yòng wǒ zhě jī yuè ér yǐ kě yě sān nián yǒu chéng

子の曰はく、苟も我を用ゐる者有らば、期月のみ可なり、三年にして成ること有り。

司馬遷はこの言葉を、衛の霊公に仕官できなかったときのこととしている。苟（いやしく）もは、かりそめにも、仮に、もし。くらいのもの。集註に、期月は、周一歳の月、一年のこと。可は、紀綱布くを言うなり、有成は、治功成るなり、とある。もし、私を用いる者があれば、一年にして政治の原則を定め、三年にして、治めてみせるのであるがと申された。
読書会：成すとは同篇9）の人が多い、豊かにする、教育するとあったこと。史記世家では、孔子が三ヶ月政治を行うと、魯の国の政治が動いたとある。能力があったが敵を作ってしまう、既得権を持つ人々に損害を与えることがあった。王安石が民のために制度を変え、それは小泉改革どころじゃないのだが、既得権者達から結局退けられることになる。王安石は孔子の再来とまでいわれたが、もし、登用されていなかったら、孔子のように名を残したかもしれないが、登用されたために、周りの人から行き過ぎと批判され、悪い政治家のイメージが残った。孔子は登用されないのがよかった。[先進篇25](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/senshin.doc)）で子路が三年あれば 民に勇有らしめ、義にいざなうと言って、先生に笑われた話があった、孔子も子路も政治に自信があって、三年は一つのメドであった。

11）子曰善人為邦百年亦可以勝殘去殺矣誠哉是言也

zǐ yuē shàn rén wéi bāng bǎi nián yì kě yǐ shèng cán qù shā yǐ chéng zāi shì yán yě
子の曰はく、善人邦を為むること百年、亦、以て殘に勝ちて殺を去つべし。誠なるかな是の言は。

[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)に、殘を勝（つ）くすは、殘暴の人を化し、惡を爲さざらしむなり。殺を去（す）つは、民善に化して、以て刑殺を用いざる可きを謂うなり。蓋し古是の言有りて、夫子之を稱す、とある。亦可以は～も（また）可能となる。善人が邦を為（おさ）めること百年すれば、また、乱暴者もいなくなり、死刑もなくなることはある、という格言は、誠にその言葉の通りだな、と申された。歴史上中国においては、善人為邦百年、以勝殘去殺といふことは、まずありえない。聖王にして可能なこと。これは夷狄には聖王が居ないが勝殘去殺の邦があるといふ伝承があり、筏に乗って東海に出るとした（[公冶長篇7)](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm)）孔子はそのような邦であるなら三年で成しえようという自負があった。
読書会：政治をするのがまことにむつかしい。誠には本当にむつかしい。善人百年はむつかしい。それでやっと正しくなる、孔子は三年というが現実にはむつかしい。次に出てくるが、王者があらわれたら一世で成る。時代に対する嘆きが入っている。

12）子曰如有王者必世而後仁

zǐ yuē rú yǒu wàng zhě bì shì ér hòu rén
子の曰はく、如し王者有らば、必ず世にして後に仁ならん。

集註に、王者は、聖人の命を受けて興るを謂うなり。三十年を一世と爲す。仁は、敎化浹（あまね）くを謂うなり、とある。王者とは文王、武王、周公をさす。善人の為（おさむ）政治なら三年で実現できようが、仁の実現となれば、三十年はかかるだろうな、と申された。程子は、民を漸（ひた）すに仁を以てし、民を摩（と）ぐに義を以てし、之をして肌膚に浹（とお）り、骨髓に淪（しず）めて、禮樂興る可からしむるは、所謂仁なり、とする。如有王者は、現実にはいない王者を仮定しており、そして、知天命としていた孔子が、天我を喪ぼせり、という事態を迎えての言葉か。
読書会：10～12、この三つがならんでいるが、現実に絶望している、自分だったらこうという想いがある。

13）子曰苟正其身矣於從政乎何有不能正其身如正人何

zǐ yuē gǒu zhèng qí shēn yǐ yú cóng zhèng hū hé yǒu bù néng zhèng qí shēn rú zhèng rén hé
子の曰はく、苟も其の身を正しくせば、政に從ふに於いて何をか有らむ。其の身を正しくすること能はずして人を正しくすること如何。

これは同篇６)の子曰其身正不令而行其身不正雖令不從と対となるとされる。しかし、ここでは、苟とあり、身を正しくさえすれば、政治を行うに問題はないのに、という嘆きがある。孔子は哀公や季康子が身を正すことを考えてくれればと嘆いておられたのか？それが出来ねば、仁義、禮樂のある政治はおろか、善人の政治すらおぼつかぬ。これを次句と関連づければ、季康子の宰を務める冉子に向かって、反省を求めたものともなろうか。
読書会：何難之有、何の難しいことがあろうか、いや、ない。何有は何ら難しいことはない

14）冉子退朝子曰何晏也對曰有政子曰其事也如有政雖不吾以吾其與聞之

rǎn zǐ tuì cháo zǐ yuē hé yàn yě duì yuē yǒu zhèng zǐ yuē qí shì yě rú yǒu zhèng suī bù wú yǐ wú qí yù wén zhī
冉子朝を退く。子の曰はく、何ぞ晏きや。對へて曰く、政有り。子の曰はく、其れ事なり。如し政有らば、吾を以ひずと雖も、吾其れ與りこれを聞かむ。

集註に、冉有時に季氏の宰爲り。朝は、季氏の私朝なり。晏は晩なり。政は國の政。事は家事。以（もち）うは用うるなり。禮に、大夫事を治めずと雖も、猶國政を與に聞くを得、と、あり。冉子が朝を退(しりぞ)くとは季康子の朝廷とする。先生は、何ぞ晏（おそ）きとは、案じる気持ちが込められている。冉有は政務であると応へた。先生はそれは事であると叱責された。季康子を手助けするのみで、国政とは名ばかり、名を正せ。如し国政というならば、たとえその任にあらずとはいえ、大夫をつとめた私にも話があるはず、私は何も聞いてはいない、と申された。
読書会：三桓子の軍事力、財力を国に帰属させようとして分断していいところまでゆくが最後のところで結束されて孔子は失敗、権力を魯公に集中させたいが、三桓子を合わせると魯公を上回る。それで放浪し14年して帰って来るのだが、弟子の数も多くシンクタンクみたいなもので、孔子を雇うのは大変だが弟子を雇いたいとなった。冉有は頭が良く、季氏が政治を動かしており、それに乗ってゆこうとする。それを孔子が批判する。

15）定公問一言而可以興邦有諸孔子對曰言不可以若是其幾也人之言曰為君難為臣不易如知為君之難也不幾乎一言而興邦乎曰一言而喪邦有諸孔子對曰言不可以若是其幾也人之言曰予無樂乎為君唯其言而莫予違也如其善而莫之違也不亦善乎如不善而莫之違也不幾乎一言而喪邦乎

dìng gōng wèn yì yán ér kě yǐ xīng bāng yǒu zhū kǒng zǐ duì yuē yán bù kě yǐ ruò shì qí jī yě rén zhī yán yuē wéi jūn nán wéi chén bú yì rú zhī wéi jūn zhī nán yě bù jī hū yì yán ér xīng bāng hū yuē yì yán ér sàng bāng yǒu zhū kǒng zǐ duì yuē yán bù kě yǐ ruò shì qí jǐ yě rén zhī yán yuē yǔ wú lè hū wéi jūn wéi qí yán ér mò yǔ wéi yě rú qí shàn ér mò zhī wéi yě bú yì shàn hū rú bú shàn ér mò zhī wéi yě bù jī hū yì yán ér sàng bāng hū
定公問ふ。一言にして以て邦を興す可き、諸有るか。孔子、對へて曰はく、言、以て是の若き可からず其れ幾きなり。人の言に曰く、君と為すは難し、臣と為すは易からず、如し君と為すこと難しきを知らば、一言にして邦を興すかに、幾からずや。曰く、一言にして邦を喪ぼす、諸れ有るか。孔子對へて曰はく、言、以て是の若き可からず其れ幾きなり。人の言に曰く、予、君と為すを樂しむこと無からむ。唯だ其の言にして予に違ふこと莫きなり。如し其れ善にして之に違ふこと莫くば、亦た善ならずか。如し不善にして之に違ふこと莫くば、一言にして邦を喪すに幾からずか。

定公、問ふ、一言にして、可以は～ができること、邦を興すことができるもの、諸が有るか。史記に、定公十四年（BC496）、孔子、年五十六、大司寇に由りて相の事を行攝（宰相代行）し、喜色有り、とある。陽虎、亂を爲し、公山不狃、費を以て季氏に畔（そむ）いたのが、定公八年のこと、孔子を中都の宰に登用して、司寇、大司寇となり、魯が治まってきた時代の対話。孔子の政治信条を尋ねた時のことであろう。孔子が慎重に応えた。言だけでは、不可以は出来ない、若是とは邦を興すこと、しかし、幾（ちか）づくことは出来る。人之言曰とは世の中でこう言われていること。君たることは難しく臣たることは容易ではない。如（も）し、君たることの難しさを知れば、一言にして邦を興すことに幾からざらむ。顔淵11)の、君君臣臣父父子子である。定公は逆に、一言にして邦を喪（ほろ）ぼすこと、諸が有るか、と問ふ。また、慎重に孔子が応えた。言だけで、邦を喪ぼすことはないが、幾きことは起こる。世の中でこう言われている。予は君たること樂しむことは無い。雍也篇18）に、知之者不如好之者好之者不如樂之者とあるごとく、君たりて樂しむことが出来ないならば危ういといふ。唯とはただ楽しいのはの義。君が言葉を発すると君に違ふことがない、命を発すれば臣は違うことなく従うのが楽しいとされる。如しその言葉が善であり違ふことがない場合でも、不亦善乎、善いと言へようか。たまたま結果的によかっただけである。如し、不善なる言葉を発して、違ふことがなければ、諌める者がいなければ、一言にして邦を喪ぼす、に幾くありませんか。孔子は言葉よりも、その言葉を発する主体のあり方を問うた。定公十四年に齊から美女を送られ、政事に怠った定公のもとを、孔子は辞し、衛に向かった。
読書会：不亦善乎は、学而篇に不亦楽乎あるように反語、楽しからずや、いや大変楽しい。善からずや、いや大変善い。善いことをして違うことがない場合は、善からずや、いや大変善い。善いことをするに違わない、は大変善いこと、しかし、善くないことに違わないのは邦を喪ぼす。孔子は非常に慎重に答えている。それも自分の言葉でなく、こういうことが言われていますと人の言葉。遠まわしに君主であることの難しさを自覚することを求めた。実は定公は孔子を買っていたが、定公のこの態度、一言でできるような政治を求めているがそれはない。これが女楽につながり、孔子が魯を出るが、貴方がしっかりしないからこうなるということ。孔子が慎重なのは、この時定公とは君臣関係、上下関係がしっかり出来ていた時、公の立場をよく考えなければならない立場で言っている。

16）葉公問政子曰近者說遠者來

shè gōng wèn zhèng zǐ yuē jìn zhě yuè yuǎn zhě lái
葉公、政を問ふ。子の曰はく、近き者說び遠き者來る。

葉公は楚の葉縣の尹（長官）、姓は沈（しん）、名は諸梁（しょりょう）、字は子高。木の葉っぱのときはyè（エフ）、地名ではshè（セフ）とは成田君の言。葉公を頼って蔡の古都、負函（ふかん）を出て葉に入ったのが哀公6年(前489年)、孔子64歳。蔡は楚軍と呉軍の緩衝地となり、葉公が駐留して政治を行うに際して、孔子に問うたことになる。蔡国の民は流民と化していた。近き者とは、その地に居る者、それらが說ぶこと、遠き者とは逃げ出した者、それらが戻ってくる、そういうような政治をすべきとなろうか。
読書会：自分の国の民が喜ばないと民は逃げる。そうなれば、税金はすくなくなり、結局国力は落ちる。民を土地につけることは、中国でも大切、農作業が出来なく、徴兵ができなく、では国が成りたたない。葉公のやり方では。それが欠けている。

17）子夏為莒父宰問政子曰無欲速無見小利欲速則不達見小利則大事不成

zǐ xià wéi jǔ fù zǎi wèn zhèng zǐ yuē wú yù sù wú jiàn xiǎo lì yù sù zé bù dá jiàn xiǎo lì zé dà shì bù chéng
子夏、莒父の宰と為り、政を問ふ。子の曰はく、速にすること欲すること無かれ、小利を見る無かれ。速にすること欲すれば、則ち達せず、小利を見れば則ち大事成らず。

莒父は魯の東南の新開拓地、莒（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/mapro.htm)）のこと。子夏がその宰となったとき先生に政治について問うた。先生は、無欲速、速（すみやか）にしようと思うな、無見小利、小利にとらわれるな。焦っては達せず、小利にとらわれれば、大事は成らずと申された。子夏は子張とよく対比される、程子は、「子張は常に高きに過ぎて未だ仁ならず。子夏の病は、常に近小に在り。」とみている。
読書会：朱熹は学問を薬を煎じる事に例える。丹薬はすごい炎で煮るが、薬を完成するには弱火でじっくりする、強火で一気に料理しても、美味い、きちんとした料理にならない、薬も人もそれだけでは、きちっとしたこが出来ない。ここでは政治について言っている。教育政策をたてるときには次世代を見据えねばならないが、早く成果を出そうとすると、目先では成果が上がっているようにみえてもそうはゆかない。

18）葉公語孔子曰吾黨有直躬者其父攘羊而子證之孔子曰吾黨之直者異於是父為子隱子為父隱直在其中矣

shè gōng yù kǒng zǐ yuē wú dǎng yǒu zhí gōng zhě qí fù rǎng yang ér zǐ zhèng zhī kǒng zǐ yuē wú dǎng zhī zhí zhě yì yú shì fù wèi zǐ yǐn zǐ wèi fù yǐn zhí zài qí zhōng yǐ
葉公、孔子に語りて曰く、吾が黨に躬を直くする者有り、其の父、羊を攘みて、子之を證はせり。孔子の曰はく、吾が黨の直き者は是と異なれり、父は子の為に隱し、子は父の為に隱す、直きは其の中に在らむか。

葉公を通じて楚の昭王に仕えることを考えていた孔子である。葉公としては、葉県での政治の良さをいささかも誇らしく、孔子に語って言ふた。吾が黨とは郷党でのこと。直躬者は躬（み）直（なお）くする者、あるいは正直者の躬（きゅう）ともされる、攘は祓う、退けることが原義、ここでは、“ぬすむ”と訓じ、人のものが自分のところに来たものをそのまま自分のものにすること、紛れ込んだ羊を返さずそのまま自分のものにすること。その時に、子がこれを證（あら）はすとは、証言すること。父がそのまま盗んだ、と正直に申し出るほど治まっている、と。孔子は、吾黨の直者はそうではないと言ふ。そのような場合には、父は子をかばい隱し、子は父をかばい隱す。直とは其の中に在るものではないか、と申された。孔子は訴訟を起こさないことを重んじた、子は父を罪人とすべきではなく、父に申し上げ、羊を返すことにつながるような方策をとることを求めよう。楚の政治と魯の政治の伝統が異なっていた。
孔子、陳と蔡の間で困窮し、「子貢を楚に至らしむ。楚の昭王、師を興し（軍を発し）孔子を迎へる。然る後に、（包囲を）免がるを得る。昭王、將に以て書社の地、七百里（1万７千5百戸の土地）を孔子に封じむとす。楚の令尹（れいいん：宰相）、子西（しせい）曰く、｢王の諸侯に使（者）をせしめて子貢の如き者有るか。｣曰く、「有ること無し。」「王の輔相（補佐する大臣）に顔回の如き者有るか。」曰く、「有ること無し。」「王の將率（大将）に子路の如き者有るか。」曰く、「有ること無し。」“王の官尹（官吏）に宰予の如き者有るか。」曰く、「有ること無し。」「且つ楚の祖、周に封ぜらる。子男（しだん：爵位）と號して五十裏（里）（楚の祖も最初は五十里四方の国）。今、孔丘、三五之法（三皇五帝の政道）を述べて、周（公）召（公）之業を明（あきらか）にす。王、若（も）しこれを用ゐなば、則ち楚、安ぞ、世世堂堂として方數千里を得むか。夫れ文王、豐に在（ま）し、武王、鎬に在し、百里之君、卒ひに天下を王す（百里之君がついに天下を治めた）。今、孔丘、土壤（七百里）に據（よる）を得て、賢弟子、（補）佐さば、楚の福に非ざるなり（庇を貸して母屋をとられる）。」昭王、乃ち止む。其の秋（BC489）、楚の昭王、城父に卒す（史記）。」とある。しかし、結局は昭王の死を迎え、楚への仕官も断たれた。孔子63歳のこと。
読書会：父子の愛、父をかばう絆のある子は分る。国を治めるは家を治めるから始まる。それは分る。しかし、ここで正しくないことを隠すというのは違和感がある。かばわれるというのは、実際は身にしみる、信頼関係があればなお一層のこと、そうなる。孔子は国家より父子関係が先であると考える。舜とその父の関係、継母やその子を含めて舜を殺そうと色々悪い事をなすが、結果的にどうしたかというと、舜は目をつぶって許した。父母が過ちを犯せば、遠まわしに諌め、聞いてくれないと退く、諌めを何度も繰り返さないというのが儒教。葉公のようにすることは家庭崩壊につながる。直は、その中にあり。

19）樊遲問仁子曰居處恭執事敬與人忠雖之夷狄不可棄也

fán chí wèn rén zǐ yuē jū chǔ gōng zhí shì jìng yǔ rén zhōng suī zhī yí dí bù kě qì yě
樊遲、仁を問ふ。子の曰はく、居處して恭しく、事を執りて敬しく、人に與して忠あること、夷狄に之くと雖も、棄つべからざるなり。

樊遲が仁を問ふのはこれが三度目の収録。雍也篇20）先難而後獲、顔淵篇22）、愛人があった。居處はここでは邸宅内でのこと、父母兄弟、夫婦、父子を想定しようか、立ち居振る舞いが恭しいこと。執事は仕事の場、上司、同僚と仕事に就いてはこれを敬する。與人は人と行動を共にすること、忠すとは、自分の役割を果たす、裏切らぬこと。このことは、夷狄に之（ゆ）くとしても、同じ、棄（す）つべからざるもの、ましてや、中国においておや。
読書会：孔子は人と人の関係、孔子の道徳のシステムの中に人を中心として、恭、敬、忠の三つを失ってはならないとする。具体的に人と接するときの答えを教えた。夷狄に行ってもという深い強調、これさえしっかりすればいいのだということが重要。中国古代の歴史においては、華夏（かか）に対する、夷狄の関係、華夷関係という上下関係だが、血統とか出身ではなく、恭、敬、忠に心服するならば中国人とみなす。中国出身でも、これに心服しなければ夷狄とみなす。



樊遲が何回も出てくるのは、クレバーでないところが、キーポイント。プライドの高い人は聞けない。顔淵のような弟子ばかりでなく、もっと仁について具体的に知りたいと思っていたでしょう。樊遲への答えが、わかりやすいものであり、編者が意図的に何度も入れたとも考えられる。樊遲の食いついてゆくところは評価に値する。出来は悪いかもしれないが、器は大きい、また、孔子は樊遲をかわいがっていた。

20）子貢問曰何如斯可謂之士矣子曰行己有恥使於四方不辱君命可謂士矣曰敢問其次曰宗族稱孝焉郷黨稱弟焉曰敢問其次曰言必信行必果硜硜然小人哉抑亦可以為次矣曰今之從政者何如子曰噫斗筲之人何足算也

zǐ gòng wèn yuē hé rú sī kě wèi zhī shì yǐ zǐ yuē xíng jǐ yǒu chǐ shì yú sì fāng bù rǔ jūn mìng kě wèi shì yǐ yuē gǎn wèn qí cì yuē zōng zú chēng xiào yān　xiāng dǎng chēng tì yān yuē gǎn wèn qí cì yuē yán bì xìn xíng bì guǒ　kēng kēng rán xiǎo rén zāi yì yì kě yǐ wéi cì yǐ yuē jīn zhī cóng zhèng zhě hé rú　zǐ yuē yī dǒu shāo zhī rén hé zú suàn yě
子貢、問ひて曰く、何如にして斯れ之を士と謂ふ可き。子の曰はく、己を行ひて恥有り、四方に使して君命を辱めざるを士と謂ふ可し。曰く、敢へて其の次を問ふ。曰はく、宗族孝を稱し、鄉黨弟を稱せむ。曰く、敢へて其の次を問ふ。曰はく、言必ず信し、行必ず果す、硜硜然として小人かな。抑も亦以て次と為す可し。曰く、今の政に從ふ者何如。子の曰はく、噫、斗筲の人、何ぞ算ふるに足るや。

子貢は、どうであれば、之を士と謂へますかと問ふ。行己有恥は珍しい表現、行は四つ辻の形、ゆく人来る人が往来する所。行己は己から出で己に返ること、先生は、日々の自分の行為について、有恥、恥じる気持ちを保つこと。己の志、行はずを恥じる。使於四方は外国との交渉に臨むこと、不辱君命とは、国を代表して交渉を行ふ以上自ら辱められることは、君命が辱められることであり、全力を尽くして使命を果たす、士と謂ふ可し、と申された。其の次はどうですかと問ふ。宗族では孝を称賛され、郷黨では弟を称賛される。孝弟を修めることと申された。其の次はどうですかと問ふ。言ふことに必ず信があり、行ふことは必ず果たす。硜硜（こうこう）然は小人の様を形容する言葉、小さな堅い石、こつこつとしている様。抑（そもそ）も亦（ま）た以て次としていいだろう、小人であっても嘘をつかず、約束を守るなら、その次にいれてよいだろう。ここが士の限界、これに次ぐ士はない。子貢は、ここで話題を一転した、今の政治を行う者は何如、士といえますか、と問ふた。噫yī嘆息された。斗は十升、筲は竹器で十二升の容器、斗筲之人とは石高（一石、100升）の士の反、小者の例え。何ぞ算（かぞ）ふるに足（た）るや、数にも入らない。子貢は自分を「使於四方不辱君命」と思っている。先生からお前は～のような士だと評価を受けたい。仕方なく次ぎのレベルに移ったが、それでもない。更に一段落としたが、それでもない。困ってしまい話題を現実の政治家に移したが、ろくでもない連中という反応だけで、お前なら士だねの言葉が聞けなかった。直截に、私は士ですかと聞けばもっと明瞭な反応が返ってきたであろうが、先生はそうとも申されず捨て置かれた。そういう聞き方ではこういう結果に終わるぞ、と態度で示されたことになろうか。先生は、使於四方不辱君命では十分に士であるが、行己有恥において更なる精進を求められたのかもしれない。
読書会：日本語の恥は、正しくないことをしていると知ること。こっちは、自分が行ったことに対するもの、自分が頭で考え、口に出したことを行っていない、そういう反省の心。自分を驕ってはいけない。諸侯、大夫、士、庶民というのが周王朝の社会構造。士は国にしばられず、魯がダメなら斉に行くとかありえた。恒産とは常にある俸禄。恒産がなくても恒心を持っているのは士。恭、敬、忠の心が大事。春秋時代には貴族、諸侯に代わって大夫が実験を握り、魯では三桓氏が実権を握り、被支配階級であった人物が次第に大夫政治に参加してくるようになる。魯の政治のなかにも士が台頭してくることは、孔子の時代の風潮。子貢が行う質問の背景。子貢は外交において君命を辱めざるを士に充分値するが、己を行いて恥有りには及ばない。己を行いて恥有りは顔回。科挙制度が整う隋唐以前は、宗族における孝、郷党における弟は人材を選択する方法、今の中国でも、高学歴で優秀であっても、宗族、地域社会で称されることがないと、政治家になることはむつかしい。

21）子曰不得中行而與之必也狂狷乎狂者進取狷者有所不為也

zǐ yuē bù dé zhòng xíng ér yǔ zhī bì yě kuáng juàn hū kuáng zhě jìn qǔ juàn zhě yǒu suǒ bù wéi yě
子の曰はく、中行を得てこれに與せずば、必や狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は為さざる所有り。

中行は中庸の行いをする人。自分のことを想定しておられよう。そういう人を得て仲間となることがなければ、狂狷を仲間とする。どうやら孔子の弟子は中行がおらず、狂狷が多かったとみえる。進取とは義疏に、「江熙云、狂者は進むを知りて退くを知らず、取るを知りて與（あたへ）るを知らず。」とするが、解釈がわかれる所。集註は、「狂者は、志極めて高くして行を掩わず。・・・孟子曰く、孔子豈中道を欲せざらんや。必ずしも得可からず。故に其の次を思えり。琴張･曾皙･牧皮が如きは、孔子の所謂狂なり。其の志嘐嘐（こうこう）然として曰く、古の人、古の人、と」とする。狂とは書経、微子に、「我はそれ狂を發出せん」とあるごとく、紂王の過ちを匡さんとして容れられず、狂となりて殷を出る。憑かれた者であるが匡すという動機が満たされないという状況がある。周公の政を目指し、今の政を匡さんとして狂たること、そのような者であれば與（くみ）せんか、狷とは、分を守って節を立てること、為してならぬことは決して為さない、大夫の身で諸侯の祭祀を行うなどもってのほか、頑なにそれを拒否する者、そのような者であれば與せむ、という気持ちはどうか。
読書会：狷には狷急と狷介の意味があり、狷急なら狂とかわらない。狷介は、日本語ではとっつき悪のい人だが、中国語では耽直、狷急はせっかち、せわしない、狷介はプラスイメージ、日本語では、隠居して、こもって、意固地な感じで正直者のイメージがない。狷について、朱熹は節と義を守りて、といれている、穂積氏は、不善をなさない、貝塚氏は妥協しない人とみている。狂であれば狷、狷であれば狂を用いてバランスをとるともみれる。顔回のように中行がとれればいいが。孔子は狂を否定していない。狂狷と共にすれば、彼らを導く、自分のやる仕事があると孔子はみている。必ずや狂狷というのは絶対狂か狷しかないという感じ。孟子は、中行は孔子、狂狷を伯夷、叔斉、柳下恵、伊尹等々をあげ、狂者も得られなければ、狷者をとれと三段階の順序をつけている。狂狷は、過ぎるも及ばずも、両方をたてている。

22）子曰南人有言曰人而無恆不可以作巫醫善夫不恆其德或承之羞子曰不占而已矣

zǐ yuē nán rén yǒu yán yuē rén ér wú héng bù kě yǐ zuò wū yī shàn fú bù héng qí dé huò chéng zhī xiū zǐ yuē bù zhān ér yǐ yǐ
子の曰はく、南人言有りて曰く、人にして恆無くば、以て巫醫を作す可らず、善ろし。其の德恆ならず、或ひはこれ羞を承く。子の曰はく、占はざるのみ。

南人とは南国の人と集註にあるが、魯からみれば呉あるいは越となるが、周からみれば楚となる。楚は巫の国であり、その伝統から楚辞が生まれた。楚のことわざにこういうものがある。恆（つね）は常、巫（ふ）は鬼神に交わる所、醫（い）は死生の寄する所と集註にある。巫は工（呪具）を以て鬼神に交はり、醫は矢（呪具）を殳（う：打）ち酒を以て病魔を祓う。作は、恆の無い人が巫醫になれない、あるいは巫醫にかかれないの二説がある。文脈からすれば前者であろう。善い言葉だな、と先生が申された。不恆其德或承之羞は易恆の卦、九三爻の辭、｢不恆其德或承之羞　貞吝：その德を恆にせず。あるいはこれが羞（はじ）を承（う）く。貞しけれども吝なり。象に曰く、その德を恆にせざれば、容（い）れらるるところなきなり。（岩波文庫）｣子曰がここに入り、易の文と別けられて、不占而已矣となるのは、「其の義未だ詳らかならず。」と集註にある。単純に解釈すれば、不恆其德或承之羞が先生の言葉でないことを明瞭にしたとなろう。釈が色々あることになる。これは易についての話の一部であろうか。先生としては、易を学ぶことはできても、恆無き人間が占っても羞を受けるだけであり、やめておけということになろうか。先生自体も占うことはされなかったのだろう。

読書会：自分の言うこともやることも、ころころ変わる人は巫にも醫者にかかっても治すことができない。バランスのだめな人は羞をかく、占うまでもなく、あたりまえのこと。恆のない人間は巫醫となってはいけない。人にして恆なくば、巫女や医者になってはいけない。確固たるところがなければ、当たるも当たらぬも八卦、治るも治らぬも・・・というのはいけない。恆が共通する。易の言葉を引いて、徳に恆なければ羞をすすむ、と徳行がなければ、自分から羞をさらすことがある。その次が読めない。占わないだけだというのは、話がつながらない。恆は、どこでも、そういうこと。占いとかでなく、当たり前のこととして重要。南蛮の人も言っている。士大夫も恆がないとダメ、巫醫という卑しい身分でもそう、易でもそう。

23）子曰君子和而不同小人同而不和
zǐ yuē jūn zǐ hé ér bù tóng xiǎo rén tóng ér bù hé
子の曰はく、君子は和して同せず、小人は同して和せず。

中庸に、「天命これを性と謂い、率性これを道と謂い、修道をこれ教と謂ふ。道なるは、須臾（しゅゆ:寸刻）も離るべからざる。離るべきは道に非ざる。是の故に君子その睹（み）ざる所を戒慎し、その聞かざる所を恐懼す。隠れたる見（あらは）ることなきか。微（かす）かなる顕（あらは）ることなきか。是の故に君子その獨を慎むなり。喜怒哀樂の未だ發せざるこれを中と謂ふ。發して皆節に中（あた）るこれを和と謂ふ。中なるは天下の大本なり。和なるは天下の達道なり。中和に致りて、天地位し、万物育す。」とある。節とは出入りに際して用いる竹の割符が原義、喜怒哀樂の対象と己が心の間の往来に節が過ぎたり、及ばざることなきよう、中（偏りのない心の状態）とすることが和といふ。礼記、礼運に、「大同の行はるるや、天下を公と為す。」とあるが、この場合の同は、喜怒哀樂に同じること。不恆其德或承之羞とは、中を失い、喜怒哀楽に同じ、或は羞を承くこと。君子は未だ発せずの中を失はず。更に、中庸に、「仲尼曰く、君子は中庸す。小人は中庸に反す。君子の中庸は、君子にして時に（何時も）中す。小人の中庸は、小人にして忌憚（いみはばかる:遠慮）なし。」とある。小人が和せずは、忌み憚かることがない、隠れたるも微なるもあらわれることを戒慎、恐懼し、獨を慎むことがない。

読書会：小さな変化を一杯もって、それぞれが違う方法をとっているようでも調和している。それがいい状態。小人は同して和せずは同じ意見。平行線みたいな形をとるが一つの場所にとどまれない。建設的でない感じ。音楽では、非常に分りやすいのですが、ハーモニー、和声学、ある音に対してどんな音を作るか、一つの音に対して一つの音楽となるか？調和しないはそれでない状態、一つの表現になっていない、いくつかにバラけている感じ、調和しなければならない。多分反復とか同じ音形を繰り返すがひとつにはならない。国家の大事のあるとき、大事をわきまえず互いに合同する。とても大事なことが国家にあるときには君子は自分の意見をあげる。大事なとき君子は同じじゃなくて、いい意見、いい言葉を言う。料理の例えでいえば、塩、砂糖、醤油が入り調和して美味くなる。小人は自分の利益を出したい、自分のことを強調して、同じ鍋でもバランスを考えずにやるのが小人。君子は道理に従う、不合理には付和雷同しない。小人は利益ということだが、利益が道理に入っておればいい。和すには信が必要。信頼は暗黙のもの、口に出して言うものでなく、暗黙のうちに和すもの。和すには、忠告したりされたりして、うまく合わせてゆける人が必要。ベートーベンは君子。社会と調和しない行動をしている。社会と同じことをしていてはベートーベンはない。ベートーベンが自分のものを持っており君子となった。そのことをやって和をつくりだした。ベートーベンは、ある音響的状況があれば次にどうなるかということが問われるが、極端なところではずしておきながら、それが機能のある状況を作り出す、爆発するような状態。發して皆節に中（あた）るこれを和と謂ふ、とある。和は同とは違う。この言葉は、当たり前のこととして、誰にでも、どこでも引用される。それは普遍性があるからで、音楽にも、人間関係にも、料理にも説明ができる。あまりにも普遍性があり、自分に都合よく解釈ができる。

24）子貢問曰郷人皆好之何如子曰未可也郷人皆惡之何如子曰未可也不如郷人之善者好之其不善者惡之

zǐ gòng wèn yuē xiāng rén jiē hào zhī hé rú zǐ yuē wèi kě yě xiāng rén jiē wù zhī hé rú zǐ yuē wèi kě yě bù rú xiāng rén zhī shàn zhě hào zhī qí bú shàn zhě wù zhī
子貢、問ひて曰く、郷人皆これを好むを何如。子の曰はく、未だ可ならず。郷人、皆これを惡むを何如。子の曰はく、未だ可ならず。郷人の善者これを好み、その不善者これを惡むに如ず。

子貢が郷人の皆が好む人がいるがどうですか？と問うと、先生はよいとは言へないと申された。郷人の皆が惡（にく）む人がいるがどうですか？と問うと、よいとは言へない。郷人の中の善者が好み、不善者が惡む人には及ばない、と申された。子貢は如何なる人からも好かれる人物、如何なる人から憎まれようとやるべきことを実行に移すような人間を想定して、それが素晴らしい人物との同意が得られると思って問うたのであろう。先生はそんな聖人のようなことを想定しておれば、正しい者から好まれ、正しくない者からは惡まれるような人間にも及ばぬことになる、と諭された。
読書会：子貢の聞きかた、村の人がこの人がいいと言ったらどうですかと聞いても、それではまだダメと言われ、それなら全く反対から、皆がダメといったらどうですかは面白い。善者が好み、悪人がその人を惡（にく）んではじめて仁者。善者が好むだけではよい人、そのうえ、悪人がその人を惡むが真の善者、二重に慎重にみている。一面だけではなく二面からみて善者を示している。子貢の聞き方は、そういう答えを引き出すような聞き方となっている。善者がよいといい、悪者もそれをよいと思うことがあるとき、苟合、適当にあいづちをうつこと、その逆となれば、無可好之實、全くいいところがなくなる。善者がよいといい、悪者が惡むがベスト。皆が幸せになる政治ではなく、正しいものは正しく、正しくないものは正しくないということ。皆が好むといことで合格点かときくと、十分でない。ならば、皆がいやがることになってもやる、これで合格でしょうときくと、まだ上がある。善者は好み、不善者には恐れられる、不善者を正すというところがなければならない、不善者惡之にポイントがある。

25）子曰君子易事而難説也説之不以道不説也及其使人也器之小人難事而易説也説之雖不以道説也及其使人也求備焉

zǐ yuē jūn zǐ yì shì ér nán yuè yě yuè zhī bù yǐ dào bú yuè yě jí qí shǐ rén yě qì zhī xiǎo rén nán shì ér yì yuè yě yuè zhī suī bù yǐ dào yuè yě jí qí shǐ rén yě qiú bèi yān
子の曰はく、君子事へ易く説ばし難し。これを説ばしむに道を以てせずば説ばず。其の人を使ふに及びて、これを器とす。小人事へ難く説ばし易い。これを説ばしむに道を以てせずと雖も説び、其の人を使ふに及びて、備を求む。

君子に事（つか）へることは易（たやす）いが君子を説（よろこ）ばせることは難しい。君子を説ばすとは、道に適って事へてくれること。さもなくば説ぶことはない。君子は己の器をわきまへ、人の器をみて、その器に合わせて使ふ。小人に事へるは難しく、説ばせるのは易い。道に適っていなくとも説んでくれる。備とは、戦いに備えることであるが、対策を用意することでもある。小人は自分の器をわきまへず、対策をたてて事に応じるわけでなく、出来ないと、自分の責任を人になすりつけ、人に対策を求める。己の器からこぼれたものを人の器に入れようとする。
読書会：上司のタイプをみるのに分り易い。オールマイティーにやっておけば、この上司、あの人なら、どうでてきてもなんとかなる。オールマイティーではなく、自分の長所をよく知って任された時に、その上司をそう簡単に説こばせることは難しい。分って仕事がまかされているだけに。君子からすれば、立派な人をつかむには、どういう器かと見極めねばならない。使うとする人間を満足させるにも、道に沿って使うようにしないといけない。君子は器ならず。君子が君子を使うとき、器が問題。及其使人という言葉が入り、具体的な話となっている。いつもの抽象的な終わり方とは違っている。君子は小人でも器に合わせて使う、君子が君子を使うはなし、小人は君子をつかうことができない。器量に応じて使うから器、自分は君子のようになりたいが、他人にはすべてを求めず、その器を求めるにとどめるべき。もし、この場に子貢がおり、器之とは、どういうことかと孔子に聞けば、どう答えたものだろう。子貢は瑚璉と言われた。孔子が亡くなったとき、子貢のみ六年の喪に服した。まさに、立派な瑚璉そのもの。孔子がどかんと真ん中にあって子貢のよさが引き出されている。君子はコントロールができること、相応しいことに人を使う、子貢は立派に使える人であるが総合的にやることには欠けている。孟子が鄭の子産の政治を批判している。彼は人を船で川を渡すために自ら懇親の努力を果たしている、しかし、国民一人ひとりに自ら恩恵を施すことは出来ない、橋を作って渡れるようにするのが政治。

26）子曰君子泰而不驕小人驕而不泰

zǐ yuē jūn zǐ tài ér bù jiāo xiǎo rén jiāo ér bú tài
子の曰はく、君子泰にして驕らず、小人驕りて、泰ならず。

君子泰（ゆたか）にして驕（おご）らず。泰は水中に陥った人を両手で助け出すさまが原義。泰斗と言ひ、天子封禅の礼の行われる泰山と天極で動かざる北斗は最高の権威とされる。泰はおおきく、やすらかなことでもある。泰然自若の泰。驕（おごる）は、喬（高楼に表木を立てた形）で、たかぶる意に用いられ馬とも関係なく驕り傲る義に用ゐられる（字統）。泰然自若と驕慢の対比、落ち着くことと高ぶることの差、喜怒哀樂における中和の問題であろう。
読書会：君子と小人は絶対的に変わらないものではなく、ある条件のなかで、君子が小人、小人が君子に変わることができる。泰と驕をふたつならべて、ポイントは驕るなということ、君子は驕ってはいけない。

27）子曰剛毅木訥近仁

zǐ yuē gāng yì mù nè jìn rén
子の曰はく、剛毅木訥仁に近し

剛は岡（鋳型）を刂（刀）で裂いてはがす、断ち切ることが原義、そういうの性情。毅は豙（霊獣：鳳や龍、虎、蛇）を殳（殴打）して呪能を高めることが原義、強く忍び果敢に決断する、士の節操を言ふ言葉。木は、質朴なこと。訥は言少なくして意のあらわれること。仁に近いといふ。
読書会：木訥は人として純粋な状態、孔子は知識ではなく知恵をもって、純粋な状態で人に対する。木ボク訥トツ、語尾がフクツチキは入声、木訥は押韻されているので別々に切り離してはいけない。剛毅と木訥で読むべき。程子の解釈は四つの概念、だから二つの派がある、剛、毅、木、訥、と剛毅、木訥。剛は表にでる、毅は内面の強さ。

28）子路問曰何如斯可謂之士矣子曰切切偲偲怡怡如也可謂士矣朋友切切偲偲兄弟怡怡

zǐ lù wèn yuē hé rú sī kě wèi zhī shì yǐ zǐ yuē qiè qiè sī sī yí yí rú yě kě wèi shì yǐ péng yǒu qiè qiè sī sī xiōng di yí yí
子路問ひて曰く、何如なるを斯れこれを士と謂ふ可きか。子の曰はく、切切、偲偲、怡怡如たる、士と謂ふ可し。朋友には切切、偲偲。兄弟には怡怡。

胡氏曰く、切切は懇到なり。偲偲は詳勉なり。怡怡は和悦なり。皆子路の足らざる所。故に之を告ぐ、とある。子路が士を問ふた時の先生のことばは短いものであった。子路は片言とあり、ぶっきらぼうなところがあったのだろう。朋友とは懇ろに至り、切磋し励ましあう。兄弟とは仲むつまじくするようにと諭されたことになる。琴の弾き方もそうであり、弟子が嫌ったという話があった。剛毅木訥の反面であろうか。
読書会：子路は士とはどういうものかを聞いた。この答えには“はあ～？”という気になった。子路は性格上、篤い熱情を持った行動派。もっと堅いものを期待していた。しかし、粗野なところが見え隠れするので、孔子は、敢えて、気持ちのこまやかさについて言った。人は、足らない部分を指摘されると反撥しがちなので、そうならない気持ちが必要。そして、ここで厳しい指摘をしつつ、孔子は子路に期待している。鴛鴦yuān yāng双声語、叮噹tīng tāng畳韻、怡怡yí yí連綿というが、擬態語、擬音語で説明している。すごくやさしい感覚的な言葉で説明していることに留意すべき。

29）子曰善人教民七年亦可以即戎矣

zǐ yuē shàn rén jiào mín qī nián yì kě yǐ jí róng yǐ
子の曰はく、善人民を教ふること七年、亦た以て戎に即く可しか。

集註に、民を敎うるは、之を敎うるに孝弟忠信の行、農を務め武を講ずるの法を以てす。卽くは就くなり。戎は兵なり。民其の上を親しみ、其の長に死するを知る。故に以て戎に卽く可し、とある。足食足兵民信之、顔淵篇にあったごとく、民を教えて足らしめれば、民はそれを守るために兵となる。
読書会：善人ですら教える事が出来るのに、上の立つ人間は根本において人を教える必要があるのに、君子はどうして、民から信じられ、民の安定をはかり、軍備まで至るように教えないのか。民に何を教えるか？お互いの信頼が一番大切。信というのは、仁に近いもの。善人のやっていることはそこまでは至っていない。君子には別のやり方があり、君子のあり方を考えるように言っている。

30）子曰以不教民戰是謂棄之
zǐ yuē yǐ bú jiào mín zhàn shì wèi qì zhī
子の曰はく、教へざる民を以て戰ふ、是れこれを棄つると謂ふ。

国の大事は祀と戎にあり、祀とは祭祀、人間を人間社会たらしめた天帝と祖先の恩恵を、供物を捧げて謝すこと。戎とは軍事であるが、血税とは兵役のことでもある。その関係が君と民にの間に成立していること、君が民の食、職を足らしめ、その安寧をはかるからこそ、民は税（物納、労役、兵役）をもって君を維持する、この関係を教育せずしては、守るべきものが何であり、心をひとつにして戦うことは出来ない。民に教へることをせず用いて戰ふ。戦いで守るべきが、己の命のみとあらば、烏合の集にすぎず、守るべき根本を捨て去れば、バラバラに砕かれ己の命も危機に瀕する。小魚も群れを崩さぬ間は、大魚に対して巨大な圧力を形成できるが、群れを崩されると単独となり、餌食と化すがごときもの。
読書会：軍事訓練だけでは、忠誠心も何も生まれない。自分を高めることがなければならない。そうでなければ、戦死しても空虚なことになる。きちんとした信頼ある君子の下で、人間としてどう生きるべきか分かれば、自ずから忠誠心、自分の国を守る意識も生まれてくる。戦争で倒れても、自分が生きた証を持てる。深い結びつきと力は信頼関係から生まれる。孟子だったらこう云うだろう、民に仁義を教えれば、国は無敵となる。軍事教育ではない、富国強兵を言っているものでもない。これぞまさに民を棄てる。以不教民戰是謂棄之！バシッと投げつけるような言い方。許せないという孔子の強い。

2008.06.21